

第 10 回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 10 月 28 日（金）午後 1 時 00 分～午後 4 時 00 分

2 場所 小諸市民会館 3 階 大会議室

3 出席委員

飯島 俊勝委員長	荻原 拓次委員
佐藤 元太郎副委員長	宮阪 義彦委員
芹澤 勤委員	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 將喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員

4 開会

（植松主任教育支援主事）

皆さま、本日はお忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。

それでは時間になりましたので、委員長お願いいたします。

（飯島委員長）

それでは始めさせていただきます。

委員会の若葉の季節から、暑い夏、そして周りを見ると紅葉の季節で、長い委員会の開催になってきております。今回は 10 回目の第 2 通学区の推進委員会であります。よろしくお願い申し上げます。

それでは資料説明を含めまして、事務局のほうからお願いいたします。

5 資料説明

高校教育課植松主任教育支援主事から説明 【説明内容省略】

（飯島委員長）

ありがとうございました。

今日は芹澤委員、滝澤委員がご欠席でございます。なお小林委員・市川委員は、ちょっと遅れてまいるということでございます。ご了承いただきたいと思います。

それでは前回に続いて、議論をすすめてまいりますが、だいぶいろいろな意見書、報告が出てきております。その内容については別として、ここはどうなんだという質問がございましたら、お受けしたいと思います。

（原 委員）

お願いします。今、幾つかの報告等がありましたが、そのことに関して 2 点質問します。

1 点は野沢南高校にかかって、集会が行われたということですが、これを伺っています

と、この委員会で多部制、県下にかかわるさまざまな疑問が出されておりました。そのことなどが出されたように伺いました。

そういう質疑があったことに対して、教育委員会はどうにお答えになったかということが1点であります。ご参加された皆さんが、納得されたかどうかということであります。

それから2点目は、今のご報告の最後であります、望月高校にかかわって対案が出されたということでもあります。これは大変重い事柄だと思ひまして、これはまた後ほど議論になるかと思うんですが、取りあえずこういう、いわば再編整備で名前が挙がっている学校から対案が出される、この事柄について、そして望月の多部制・単位制への転換ということについて、現時点で教育委員会はどのようにお考えか、その2点をお願いします。

(飯島委員長)

報告事項ですから、その説明を受けてしまいますと、そちらのほうへどんどん話が行ってしまいますから、後でまた、その事項については教育委員会から説明を受けたいと思います。

この委員会の進め方で進めさせていただいて、そして途中で個別に今のように説明は受けたいと思います。

(西村委員)

前回の委員会までの流れからしますと、総合学科についてどこにするのかは別にして、相当突っ込んで打ち合わせをしてきて最終的にはこの推進委員会では、この地区では総合学科について具体的にはやりましようとなりましたね。

それで次に多部制・単位制について、この推進委員会では導入するかという議論をしていって、それが時間帯をとると思いますので、まずその2つ提案があるうちの多部制・単位制について合意するか否か、それを議論して、それから具体的な流れに持っていったほうが、前回の繋がりからしますと、よろしいかと思いますがどうでしょうか。

(飯島委員長)

今、西村委員から、そんなご提案がありましたが、私自身はこんなふう考えているんです。今、報告事項のように、(あくまでもたたき台の校名を出してしまってすみませんが)野沢南高校からご覧のような報告があり、また望月高校のほうからも多部制・単位制に転換をするというような、対案的な形の報告がございます。

それから先ほど冒頭に報告がありましたように、私たち4推進委員会の皆さんが、静岡中央高校、そして近々に群馬県のほうへ、多部制・単位制の高校を見学、視察するようになっています。

この多部制・単位制の問題は、今日の後半のほうにしまして、前回、総合学科高校が設置するという方向で合意を得ましたものですから、そちらのほうを今日は煮詰めてみたいと、思っております。

そしてその後、多部制・単位制のほうのお話を集中的に考えていきたい。特に、市川委員が、静岡中央高校に見学にお行きのような話も聞いておりますから、そんな方向で委員

会を進め方をさせていただければありがたいなと思いますが、いかがなものでしょうか。

（全委員）

異議なし。

（和泉委員）

いいですか。

ちょっと今の説明の中で、先ほど望月の話など説明していただきましたよね。その中でちょっともう一回確認しておきたいのですが、この委員会に求められることは、魅力ある高校づくり、それからあと適正規模及び配置という部分、この2点が出発なんです。例えば個別の代案が出てきたときに、これをこの中でやっても、一点一点やらなければいけないので、どういう意図なのか、個別にこういうことが今後も出てきたときにどうするのか。

私のイメージでは当初の趣旨の中には、頭の中では考慮しなければいけないけれど、こういう資料が出てそれに引っ張られているということは、この委員会に趣旨なのかなということがあるので、ものの考え方なんです。魅力ある高校づくりと、それから適正規模及び配置ということで、だからまだ配置については、その中の減らす中の手段として、多部制・単位制だとか仕組みを、行ってこういう形でやろうということの議論の途中だという認識をしているんですよ。

具体的にこういう話があったときに、一つ一つ我々はそういう資料を持ち合わせしてないし、それについて一つ一つ反論も賛成もできない中でどう扱うか。資料もこうあって、いただく分にはいいけれど、ちょっとどういう扱いにしていけるのかということだけは、当初の趣旨とずれるような気がする、混乱するような気がするんで、ちょっとそここの考え方だけ、もう一回出発したときの趣旨だけは確認させていただきたい。

（飯島委員長）

これは事務局にお願いしたほうがいいですか。推進委員会の設置要綱のところの再確認ということです。お願いします。

（吉江高校教育課長）

まさしく今、和泉委員からお話しいただきましたように、こちらのほうの委員会にお願いしてございますのは大きくは、魅力ある高校づくり、それといわゆる適正な規模および配置、さらにはもうひとつはそれにかかわる部分は多いと思いますが、総合学科高校、多部制・単位制高校の設置という内容でございます。

その趣旨でもちろんスタートしておりまして、それを議論いただくというのは大前提でございます。それで私どものほうで候補案をお示しいたしましたが、こちらのほうの委員会では取りあえず、それは横に置いておいてもいいかなということで進んでいると考えています。

その折りにそれぞれの地域ごとに、私どもは「出席要請を受けず積極的に来い」というようなご批判もちょうだいしている面はございますが、基本的に必要に応じましている

ろな意見交換に伺わせていただいて、それぞれの地域におきまして出されたご意見等をご報告、さらにはそれぞれの委員会に対しまして、実はこの第二推進委員会に限らず、ほかの委員さんにもそうなんです、要望等出されておりますので、それはそれぞれの推進委員会の管轄される地域のご意見ということでご報告を申し上げるというスタンスに立っております。

ですから、ある意味当然ながらこういうようなものを、こういうようなご意見、こういうようなご提案も考慮していただきながら、さらに当初お願いしたような審議報告についてご検討賜りたいというスタンスでお願いしたいと思います。

（飯島委員長）

和泉委員、よろしいでしょうか。

（和泉委員）

この委員会で資料を出されると、この資料に関してのコミットも責任もないと。ただ「資料」という認識で良いのですね。

（吉江高校教育課長）

そういうお話ですと、せっかくちょうだいしたそれぞれの方々のご内容でございますので、そのようなこともあります、ただ基本的にはそれぞれの、恐らくは次の段階といたしまして、個別の地域の議論というのをさらに深めていただくことになろうかと思っております。

その折におきまして、私どもの案は案として、そういうことで横に置くようなお話で、この委員会は動いておりますので、その案とは別に、こういうようなご意見もあるというようなことを、念頭に置いていただいて議論していただきたいという趣旨でございます。

そういう意味でいきますと、これらの意見も含めて、例えばの話が各論のお話をいただく折には、内容を見ますとご質問等あれば、私どもそれについてのお答えを申し上げる、その場面も出てこようかとは思いますが。

（和泉委員）

今のお話ですと、少なくともこれは住民の意思、何かしらのその表れだというふうに理解しなければいけないので、そういうふうに今度は逆にある面では、それに引っ張られるということは、当初の出発のときにはなかったような気がするわけだから、そのところの確認をしているわけです。

（吉江高校教育課長）

基本的には、私どもがお願いしている 14 人の推進委員の皆さんは、それぞれの第二通学区でいきますと、第二通学区のいわゆる地域の実情をよく存じ上げている方ということでお願いしてございます。

ですからまずはそれをそれぞれの委員さん方の、独立的な判断の中でお願いしたいと。ただかしながらこういうようなご意見も出ておりますので、こういうようなご意見を含

めてご検討いただきたいという趣旨でお願いいたします。

（飯島委員長）

よろしいでしょうか。

（和泉委員）

はい。

（飯島委員長）

それでは前回、この第二推進委員会では、総合学科については1校置いておくべきというようなご判断をいただいたかと思います。

それについて、こうなりますと今まで学校名を出さなかった形で議論を進めてきておりましたが、具体的な形で、たたき台を含めまして、どこが適当かということの話に必然的に入ってこようかと思います。

その辺で、一応たたき台でありますけれども、今丸子実業というのが実際に名前が挙がっております。その高校を、総合学科に移管することに対してのご意見、あるいはほかがいいだろうというご意見をいただきたいと思います。

（荻原委員）

この前の会議のご質問と繰り返しになりますが、丸子実が挙がっているわけです。旧5通学区、そしてこちらには旧6通学区から通うことは、私はなかなか難しいんじゃないかと。せいぜいしなの鉄道沿線ということで想定しておりますけれども、そうした場合に、旧6通学区でも私はひとつ必要ではないかと、そういう格好で前から申し上げております。

そうした場合前回も言いましたように、旧6通では地域高として3クラス、2クラスという学校があるわけですが、そういったものとの関連をちゃんとしないと、丸子実業がどちらかという志学館系列の進学的な総合学科に私はなるんじゃないかと思っておりますが、そうした場合にはまた普通校が1校旧5通に増えると。旧6通のほうは、多部制を現在議論されておりますけれども、原案とおりといけば南高の240人はどこかへ行ってしまうという、単純にすればそういう格好になるわけですので、総合学科が1校できることには私は反対しませんが、旧5通、旧6通の平等性あるいは地域校のあるところ、そういったところをちゃんと見ていかないと、なかなか実際に難しいのではないかと思います。

やはり旧6通学区から通える、利便性とかいろいろありますけれども、基本的にはこれも地域の事情を考えれば、それが資産や大体職業併設、専門学科併設高校を目途としているような格好ですので、こちらにもそういった学科もございますし、そういうことを考えていかないと、旧5通と旧6通で不平等になるんじゃないかと思っておりますので、私としては旧6通にもう1校あっていいんじゃないかと思っております。よろしくお願いします。

(飯島委員長)

荻原委員は、2つつくったらどうかというお話でした。確か佐藤委員は、2校つくるのはちょっとという疑問符を投げかけていただいています。

やはり原案である1校を考えるには、どこが適当かということをもとに考えたいと思います。そしてそこへ付帯決議を、「早急に旧6通にも総合学科高校を設置してほしい」という付帯決議をつけるほうがよろしいのかなと、そんなことを思っているわけであります。

それが逆に旧6通のほうへ総合学科を「この学校が良い」というものがあれば、逆に旧5通にも総合学科を1校設置してほしいという付帯決議でつけてほしいという話になるのかもしれませんが。そんなところで今、丸子実業が実際にたたき台で上がっておりますから、その名前を出すわけでありますが、その点でいかがでしょうか。

(太田委員)

事務局に伺いたいのは、本来普通高校、進学高校と実業高校という使い分けといいますか、特徴付けをきちっと整理されて、それなりきの財政投資といいますか、お金をかけてきているのではないかと思います。ここにきて実業高校、いわゆる専門性を磨き上げていかなければ価値が出ない実業高校を、単なる進学型の高校とするような総合学科制というものに切り替えていこうという、そういう意図はどういうものであるのでしょうか。

また、実業高校の在り方、普通高校の在り方、これはどういうものであるのか。その辺をまずお聞きしたいと思います。

(飯島委員長)

事務局、お願いします。

(柳澤教育主幹)

はい。総合学科高校は、必ずしもいわゆる進学校とか、そのような分けは必ずしもできないかなと思っておりますが、総合学科で学ぶことによって、それは当然進学にも対応できるし、就職をすることにも対応できると。そういう意味では大変柔軟な教育課程が組めるというふうに考えております。

専門高校の場合も最終報告書にありますように、専門高校の今後の在り方といったことについてはきちんとした提言がなされているわけでごさいます、決してその専門高校をすべてなくしていくということではございませんで、拠点化を図りつつ充実を図っていく、あるいは生徒のニーズ、地域のニーズに応じた学科変換を図っていくと、こういったことは明確に記載してございますので、専門高校は専門高校の選択ができるように、その地域、地域に配置をしていく。

またそういう中に、ひとつの新しい学びの選択肢として、あらたな第三の学科と言われる総合学科を、それぞれの通学の中に取りあえずまずは1校配置していきまじょうと、こういうような考えで候補案は作成されています。

(太田委員)

先回、先々回でしたか、塩尻の志学館、総合学科制の先生、あれは農業科の先生でしたね。私が農業系統の単位というのは人気がないんじゃないか、人气が落ちていませんかとお聞きしたら、それは否定されませんでした。そもそも農業科そのものは総合学科方式では農業系になるのか知りませんが、専門性という意味では非常に落ちてきて、従来の役割といたしますか、従来持っていた価値は、どうも発揮されていないし、刺し身の「つま」のような形になっているというような認識を私は受けました。

ということから、農業学科というのはどうされるんですか。例えば丸子実高に農業学科というのがございます。土木というのもありますね。これらを、どういう方向にこれから持っていこうとするのか。総合学科制というのは、もう私の一方的な受け止めかもしれませんが、いわゆるバイキング方式ですね。好き嫌いのある子どもたち、このコースで食べると言っても、もう食べない。だから何でも好きなものを食べていいように、いろいろな学科を用意して、バイキング形式で食べてくださいよという、こういう方式ですね。

そうなりますと、好きなものしか食べませんね。私の経験からいっても、例えば大学で学科を選択するときにも、嫌な学科とか、難しいことを言う先生だとか、評点が辛い先生の単位はなかなか取らなかったじゃないですか。ここにいる方は、ほとんどそういう経験はあると思うんです。

きっと高校生も多分私と同じような動き方をすると思います。そうなりますとますます専門性は落ちてくる、ですからフランス料理のコースを取っても、食前酒に日本酒を飲んでくるような、そんなことをやってこられて、本来の「フランス料理」というものの、本来の姿というのを勉強されない、そういう恐れもあります。

そのことに対して、総合学科制というのがどういう歯止めがかけられるのか。そこら辺はどうお考えなんでしょうか。

(吉江高校教育課長)

ひとつといたしまして、実はこの第二推進委員会は、今も太田委員さんからもお話がございましたように、塩尻志学館高校を立ち上げたときからの教員をお呼びいただきまして、ご説明をお聞きいただいた経過がございますので、ある意味総合学科については一番理解が進んでいるのはこの推進委員会の皆さま方かなというふうな認識はしているところでございます。

ただ一点申し上げますと、総合学科というようなものを国のほうで最終的に案を掲げたのは平成5年のことでございます。平成4年にまずは中間まとめということで、「総合的な新学科について」というようなものも、いわゆる審議いただいた上で、その後総合学科についてということで、平成5年に報告を受けて、それを受けて全国的に普及してまいりました。

それでひとつの理由とすれば、これはいろいろなご議論はありますが、いわゆる生徒といたしますか、年齢的にさらに若返っているのは、今の恐らく小中高校生だと思います。極論を言いますと、なかなか自分の進路を見定めがたい。さらには自分の進路に対して他方面からの要望というようなものもあって、それを考えた場合に現在の普通科あるいは専門高校というものが十分な選択肢としては、なかなか機能し得ないというようなことで、先

ほども説明申し上げましたように、第三の学科ということで位置付けられていたという経過がございます。

そういう意味では、より今の生徒のご要望には強い面があるかと思います。ただしながら、太田委員さんがご心配いただくように、バイキング方式ではないかというようなご意見もちょうだいいたしました。過日こちらのほうの推進委員会にもお出しいたしました、塩尻志学館高校の満足度とか、そういうようなものをご覧いただきますと、生徒の満足度は非常に高まっております。

一般的な学校で70パーセント程度という満足度が、志学館高校の場合には90数パーセント、93パーセントぐらいという満足度ということで高まっております。その高まった背景にはひとつとすれば、確かにややもしますと、それぞれの安易な講座を取りがちというようなものに対して、そこにいる先生が、一生懸命進路指導をしております。1年次におけるひとつの教育に対しての方向性をつける意味での学習の上で、さらに系列とかそういうようなことを配慮しながら、ややもして安易になれがちな生徒に対して、こういうような教科を取っていくようなことをしっかり、進路指導をしております。

進路指導することによりまして、例えば農業科とかあるいは塩尻高校の場合は家政科があって農業系列の科目もあるわけなんです。主にそちらのほうを目指して、そちらのほうを生かした就職あるいは進学をされている生徒も多いことでもありますので、ある意味ご心配の向きはありますが、それをしっかり受け止めて、それでまた生徒の希望を受けながらもひとつの方向性を見いだすということでの、教員のしっかりとした指導も必要だと思っています。

ですからある意味総合学科高校におきまして、塩尻志学館高校が実施してきたような、そのような意味での指導も徹底する趣旨も含めて、今後は設立に向けては努力してもらいたいと考えている次第です。

（太田委員）

これは何回も申し上げているんですが、塩尻志学館高校というのは就職が7パーセントでしたか。丸子実高は37パーセント就職されています。丸子実高の37パーセントという人たちの意識といいますか、結果は37パーセントになった理由は何なのかですね。進学したいけど進学できなくて就職したのか、就職がしたいんだけど就職先がないから、しょうがない63パーセントの人が進学するのか、そここのところが私はちょっとわからないので、何かあれば教えていただきたいんですが、そういう段階で志学館高校と丸子実高というのを、同じ範疇（はんちゅう）で考えたら、間違いを起こすことになると思います。

これは一番お客さまである生徒が不幸になるという結果になると思います。楽しさせても就職するときに専門性のない方については、企業側ではなかなか受け止められない。むしろ専門性を磨き上げて、丸子実高でしか学べないことを学んできた人のほうが就職は有利になります。今のこの厳しい時期ですから余計にそうです。

総合学科で「あれもやりました、これもやりました」という方は、民間ではなかなか受け入れにくい。この事実をどうするのか。一方的に総合学科方式なるものを押し付けて、結果としてお客さまが幸せにならなかったら、その責任は誰が取るのかと、そういうことになりませんかでしょうか。いかがでしょうか。

(飯島委員長)

だいぶ前から太田委員が質問でございます。生徒の、あるいは丸子実業の実際の今の状況をお話してください。

(植松主任教育支援主事)

前回ご質問いただいたことにつきまして、先程回答をし忘れてしまいまして申し訳ございませんでした。

平成 17 年 3 月の卒業生、進路状況で就職者 37 パーセント、37.2 パーセントでございますが、その生徒はもともとの進路希望はどうですかというようなことご質問であったと思いますが、1 年次の 9 月の進路希望調査の結果では、就職希望者はやはり 33 パーセント近くございまして、最終的には 37 パーセントということで、若干増えてはおりますが、ほぼ 1 年生に入ったときから希望を、進路を生徒が実現をして卒業しているということで、特に何かあるということはないというふうに考えています。

(太田委員)

私は、これからは学校、企業と同じなんです、それぞれの価値をどうつくり上げていくかという、そういう競争になると思うんです。価値というのは何かといえば、市場の中で受け入れられる、市場から評価されること、こういうことだと思うんです。

丸子実高さんの場合、それぞれ実業の世界に、非常に優秀な人材を送り込んで、いろいろな業界の中で活躍されています。産業界にすそ野の広い人材を送り出しているわけですね。そういう価値を持っています。言葉は悪いですが、これからは 3 番手、4 番手の進学校というものはほとんど価値がないと判断しなければいけないんじゃないでしょうか。

うちの大学へ来てくれたら、海外旅行に招待しますよという時代になってくる、そんなときに 3 番手、4 番手の進学校をつくっても、何ら学校価値は生まれないと思うわけです。むしろそういう時代には、実業高校、実業というものの価値がもう一度見直されるはずだと、私はそう思っております。

ですから教育委員会さんの考えていることというのは、時代の逆を言っているのではない、高校価値を、これからの時代に、将来に向けて下げるような方策ではないか、そのように私は思うんですがいかがですか。

(飯島委員長)

事務局のほうでもしあるようならお願いします。

(吉江高校教育課長)

先ほど申し上げましたように、全国的な流れでいきますと以前もお答えしたことがありますが、既に約 260 校近く設置という方向になっております。これはひとつの流れだろうと思っています。それとさらに申し上げますと、塩尻志学館高校が平成 11 年までの塩尻高校から志学館高校になったときの、これについては十分ご承知だとは思いますが、非常に生徒の感じとか学校の全体的な雰囲気とかも含めて、非常にいい方向に向かっているというのは、これは事実でございます。

それとさらに申し上げますと、確かに実業高校という話の上ではありますが、これはほかの推進委員会の例で誠に申し訳ないんですが、例えばよくご存じのように、企業の方々が入ってもらった生徒、あるいは高校生、卒業生を、直ちに戦力としてなかなか使い難いという話の中で、やはり確かに専門性という議論もあるものの、むしろそういう形ではなくて、例えば総合学科、普通科を出た生徒でも、しっかりやる気があって基礎知識があるもののほうが、むしろ再教育の上では十分な社員等として使い勝手が良いというようなご意見もほかの推進委員会においては出されているということでございます。

私どもは何よりも、生徒が生きがいを持って、やる気を持って卒業する高校をつくりたい。それで卒業する高校ということで、確実にいえるのは長野県は1校しかございませんが、その1校の実績等を見た場合、この1校にはなかなかほかの地域から通うことが難しい地域という、難しい状況でございますので、これを各通学区ごとに設置したらいかがかということでご提案した次第です。

（佐藤副委員長）

原則的には、私は太田委員さんと同じような意見です。前から申し上げましたように、太田さんは企業の方で企業の立場からいって、専門性の問題が疑問である。私は一番ベスになる基礎学力が、この学校、この種類の学校を多くつくると落ちるんじゃないかと、こういう立場で私も総合学科については疑問が残るというお話をしたと思います。

ですがいろいろ議論されている中で、中学の先生、それから高校の先生方のお話を聞きまして思うことは、やはり進路を決めかねているというか、正直言って授業についていけない学生がいることも事実なわけです。これはもう認めなければならない。これは我々が高校や大学へ行ったところから比べると、はるかについていけない学生が多いと思います。

そういう中で勉強することのモチベーションといいますか、動機付けをする意味で意味があるんじゃないかなというお話もございまして、私も実は総合学科をつくることによって、全体のレベルは落ちるよと。これは私も長いこと教員をやっております、高校の単位数というのは限られているわけですね。

そういう中で、いわゆる普通科目、職業科目、そういうものをやりながら同じようにレベルを上げるなんてあり得ないわけで、そういう意味で非常に心配であると、こういう話で。ですが私はこの地区にモデル校として1校はいいじゃないかと思います。

というのは先ほど申し上げましたように、ついていけないというか、まだ勉強の仕方わからない子どももいることも事実ですから、それをそれに対応して1校はいいんじゃないか、こういうふうに思っております。

それでこの総合学科の考え方というのは、対症療法的な考え方ですよ。ある意味では小中学校で多様な人間をつくって、そして多様なメニューを用意して、そしてそういう生徒を世の中へ送り出した結果がどうなるかというと、先日テレビの特別番組でやっておりますが、働く目的が全然立たない、そういう生徒をこれからどんどん作りだしていくというのは、非常に大変なことだと思います。

いま、失われた10年といいますか、失われた20年といいますか、いずれにしても一番失われたものは何かというと、やはり教育で送り出してきた現在高校生あるいは、青年ですね。こういう人を送り出してきた責任が、もう既にある。こういう中で、これからはも

っと基礎学力をしっかり身に付けて、どこでも対応できるような、教育をすべきです。今、仕事は日本では多様な程度の学力を身に付けて、仕事があるかということ実際にはないんですよ。

もう大量生産、大量消費の時代は終わりましたんで、そういう人的な資源というのは日本に求めないで、いくらでも海外で求められるわけです。ですからワークシェアリングとよく言いますが、忙しい人はよく、私の教え子なんか150時間残業をやっています。そんなことをやらないで、もっとワークシェアリングしたらいいじゃないかと言いますが、ワークシェアリングできない、そういう人材がいない。

こういう中で私は、この総合学科というのはある意味では対症療法的な、現在こういう生徒がいるということも事実ですから、取りあえずつくってみたいかと思いますが、ですから私はこの2通で、1つ総合学科をつくることに関しては、賛成いたしました。

以上です。

(中沢委員)

やや、反対の意見でございますけど、別に県教委を代弁するというそういう意味じゃなく、私のこれまでの経験の中からということなんですが、働く目的を持たない、そういった者たちが多く育っているという話がありましたが、そういう子どもが出ないために私はむしろ総合学科設置が望ましいと思いますね。

やはりこれは確かに義務教育の段階から、自分が将来どういう生き方をしたいか、どういう職業をしたいかという、そういうことは当然やっているんですが、やはりこれは高校へ行っても、さらには大学へ行っても、自分の将来の職業観というものをきちっと持ちながら学んでいく。そのために今何をしたらいいのかということ、自分で問いながら学習をしていくということが、非常に大事だと思います。

やはりそれが学習意欲にもつながる、最終的には自分の進路にもつながると、そういう意味で総合学科においては、かなり1年に入ってから職業観、職業教育というものについても重点を置いて、そしてそれを元に幾つかの選択幅の中から自分が選ぶ。

さっきバイキング方式だという話が出ましたが、それはメニューはたくさんあります。しかし自分にとって何が必要なのかということ、十分学びながらやっているんであって、ただ好きなものを食べているというのとは、私は意味が違うと思うんです。将来を見越して、自分にとって何が必要なのか、そういう観点で選んでいく。

ということですから、私はむしろこれは将来的に自分の生きがい、そういうものにもつながっていく、学習スタイルであって、大事なものだということを思っています。

以上です。

(小林委員)

私は総合学科は賛成です。全国で260校もあるということで。よくなければ、こんなに増えることはないと思います。何かいい点があり、それなりに受け入れられているものではないかなと思います。

それで2通ではどうするか。その点については、まだ私の気持ちでは、上滑りな感じがします。実際に子どもたちの学ぶ姿や保護者を通して、耳に聞こえてくることはありません。

ん。視察や資料ではご説明いただきました。

そういう意味において、スタートラインにつくときには、2校ではなくて1校。それで本当にいいという認識がされ、皆が受け入れるというふうになったときに、ある高校が手を挙げると、もうひとつ開設するという付帯の意見もつけると。

旧5、旧6、1校ずつと。これは懸念を感じております。総合学科については、生徒が魅力を持って進学すると。子どもたちが意欲を持って進学するという、そういうふうになれば一番いいと思います。

今のところ、輪切りだというような話もありますけど、思いがけず行ったいろいろな関係でそっちのへというふうになったと、いう生徒がいるとすれば、それを満たす意味においても、総合学科において意欲を持って進学することが大事だと思う。志学館の話など伺うと、それは一人一人に光を当てて、一人一人が、自分が入学したらどういう専門性を高めるかということ。

その専門性が、今の職業科の専門性とどう違うかわかりませんが、一人一人についての将来を見越した専門性を絡めていただけるのではないかなと。こういうことで、意欲を持つということが、そこへ行ってその子なりに課題意識を持つことが、意欲的に転がる原動力になるのではないかなということ、一人一人に光が当たる、そういう総合学科は、私は賛成です。

先ほど遅れてまいりましたけれども、県のサポートプランという会へ午前中出ました。そこで、子どもの居場所が問題になって、学校に行けない子や、引きこもりだとか検討する会です。そのときに子どもそれぞれが居場所、子どもたちが、心やすらぐ場所。

それは子どもによって違うんだよ、そんな話がありました。それを総合学科に当てはめたときは、ここで自分の居場所を見つけ、意欲を持って伸ばしていく。その最終段階それぞれの資格を持つというところの、内容はともかくとして、その子、本人、生徒にとってありがたい場所、そういう場所ならば、大いにつくらなければいけないのではないかと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございました。

(西村委員)

議論することは必要なことで、皆さんのご意見はほんとうによくわかるんですが、これも前回もやりましたし、前々回もやったんですよ。それで今はどこにしようかという議論をし始めているんですから、ぜひそういう議論をやっていきましょうよ。

私は今原案が出ている丸子実業に賛成です。というのは今、丸子実業が持っている施設、それから学科の内容、それから勤務している教師団等々考えますと、東信地区で考えると丸子実業が一番ベターだと私は思っています。

塩尻志学館というのがございましたが、それぞれの学校がそれぞれのパターンで新しい総合学科をつくるんです。全て塩尻志学館と同じように、総合学科をつくるんじゃないんです。丸子実業は丸子実業の形の総合学科をつくっていけば、私はいいと思います。

いろいろ聞きますと、町の中でも検討されたりしはじめていますそうですね。ただ交通の

便で否定的なご意見が出ますので、だったら例えばバスをもう1便増やしてほしいとか、付帯条件でつければ、私はよいと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(遠山委員)

私は、先の会議で。「先生方の意見も大切だが、地元の首長は地域として高校に関わって来ておるので、地元の首長の意見を聞いたほうが良い」と言ってきました。

こうした中で、私も行政関係のお付き合いや、特に隣町の丸子町の町長さんや、丸子町の行政関係者とも交流があり、これらの人々の話を聞いておりますが、「丸子町としては件の高校改革プランに積極的に乗って、丸子実業を総合学科高校にしてやっていきたい」と言う声が多いですね。従って丸子町としては、県のプラン案に異存がないと思われま

(飯島委員長)

ありがとうございました。

委員会の実質的な続きの部分に、ようやく入ってきたような感じがいたします。前回第2通では、総合学校高校を1つ設けようということで、合意を得ました。それについて会の初めに申し上げましたように、それじゃたたき台で出ている丸子実業、これはどうだというお話であります。

太田委員からは、ややいろいろなことでご意見はございましたけれども、今、遠山委からも、大変これは大事なことだろうと思いますが、地元の行政が前向きにとらえているというお話です。

それからもう一点大きなことは、塩尻志学館ができるいきさつのところで、同じように丸子実業も総合学科に手を挙げていた。これも大きなひとつだろうと思います。「ぜひ次回には、私たちの高校を」という思いが、あるのではないか。しかも過日の志学館高校の先生のいろいろな説明を聞いておりますと、塩尻志学館はモデル校としての成功を見ておりますから、その轍(てつ)を踏みながら、よりいい高校をつくっていくことは考えられるのではないかなと思います。

ですから太田委員の心配もありますが、それをプラスの方向に生かしながら、私は考えていく方向でいかなものかなと思うわけです。

それからあとは、付帯決議で。例えば荻原委員がおっしゃったように、旧6通に、早急にひとつ検討に入してほしい。

それから通学の件で難しい場合には、西村委員からバスの問題もありました。またしなの鉄道に、ダイヤ増などのことをお願いしていくという方法もあろうかと思ひます。

交通の便はより通学しやすい方向で、お願いしていくという方向もあろうかと思うわけです。

(太田委員)

地元と行政と高校が一体となって、新しい魅力ある高校づくりをするということは非常に大事なことで、大賛成です。それで今、丸子実高の件で地元の意向についてお聞きしたので、この学校の経営方針といえますか、どういう考え方で、総合学科を賛同されているのか、そんな話は聞けますか。

そういう機会があれば、お聞きしてみたいとも思うのですが。

(飯島委員長)

どうでしょうか。そこまで質問する必要がございますか。「あなたたち、どういう思いで賛成しているんだ」ということを。

(太田委員)

私も再三申し上げているように、丸子実高さんが、総合学科に切り替えることで、「何でも選択できるという自由度」というか、「選択肢が広がる」というところに強みといえますか、価値を持っていきたいということではないかと、どうも思えてしょうがないんですよ。

私が考える価値は学校そのものの、教育の中身じゃないかと思っています。例えば西村委員のところの小諸高校、音楽科というのが大変成功しているという話を聞いています。白馬村のほうからも通っていらっしゃるというようなお話です。それは専門性といえますか、差別化され、特化されたそのものに魅力を感じているから、人気が出るというように、私は解釈しているわけです。

上田染谷丘の英語科も同様だと思います。ですからむしろ中身を濃くしたり専門性を高めたり、今の時代、これからの時代に即した教育内容を用意し、これが優先されて行われる、それこそが魅力ある高校づくりにつながるのではないかと考えています。

皆さんにもご意見を聞きたいと思うんです。よく考えてあげないといけないし、どうも魅力に対する考え方をとり違えているんじゃないかと思うのですが。

(飯島委員長)

その件につきましては、当初魅力ある学校づくりのときに、こういう教育方法がいいとかいう教育論の話になったときに、その教育論をここで議論していくと、どれが正しいか正しくないか、その判断を私たちができないと。

それからあるところでも、県会議員の先生のおっしゃっていた、前回皆さんのところに配られた資料にも載っておりましたね。「魅力ある学校づくりは、魅力ある教師だと。教師づくりなんだ」という話が、議事録の中に載っておりました。

それを言ってしまうと、私たちはここで議論できなくなってしまうと思うんです。やはり私たちは、ハード面で魅力ある学校づくりを軸として、あとは教育委員会あるいは学校の先生たちが、精いっぱい活用するような形でやっていただくというお願いしかないのではないかなと、そんなふうに思うんですがいかがですか。

(太田委員)

委員長、そうじゃないと思うんですね。むしろ今の論議のほうを基本的にやらないといけないと思います。学校の形態だけをどうこうすると論議してもわれわれの役割は果たせないのではないかと思います。委員長の今の考え方について、私は大変疑問です。

(飯島委員長)

それでは皆さんが、当初これはある程度その辺のところは合意を得て進めてきている。と。思っておりますが…。この件について少し、ご意見をいただきます。

(原 委員)

いろいろと失われた 10 年などという発言もあったり、それが教育の責任なのかということとをあらためて問い直してみて、どうも少し違うんじゃないかと思いながら、しかし今、大変に重要な問題は、どこの高校においてもこれは前に何度も申し上げたことがあります。が、学習意欲がほんとに足りないというか、そういう問題なんですね。

例えば大学進学という目標がなくなったら、勉強しなくなっちゃうんじゃないかというような実態が、実は今日日本の学校を覆っている極めて深刻な問題だというふうに思っています。

そういう状況の中で、中学から高校へ来る。私も幾つか高校を経験してきましたが、普通科に来る生徒のほうの方がよくわからないわけですね。私どもが育った時代とは全く違って、今地域にどういう産業があるのか、どういう仕事があるのかということについては、ことのほか疎くなってきているわけですね。そのくらい見えにくいわけです。

従って自分の将来像が 15 歳の段階で見えないといっても、これは彼らを責めるわけにはいけないと思うんですね。私も前から言っていますが、総合学科を全否定しているわけではなくて、総合学科の持っている有利な点というのは十分承知はしているわけです。そこで自分のキャリアを意識していく。そういうことは、あえて言えば普通科を総合学科に転換したほうが、今日的なんですね。

それは太田さんがおっしゃられるように、専門高校には専門性があるんです。とりわけ建築とか土木とか、重装備の部分の専門性は、これは総合学科へ行ったら活かさせませんよね。それは太田委員がおっしゃるとおりだと思うんです。従って議論の筋とすれば、そこはほんとに教育論とすれば、普通科を転換したほうが、より価値が大きいと思っているのが一点です。

そういう視点から見ると、全国で 200 数十校総合学科の学校があるといいますが、いろいろな系列があるんですね。1,000 種類以上系列があると聞きます。しかし今申し上げた機械とか土木、建設と、そういう部分の系列というのは極めて少ないんです。2、3 パーセントしかないんです。

ですから丸実を転換する場合に、本当にその専門性を追求しながらの転換でないと、それは地元の期待に応えられない。前回の資料であると思いますが、100 人近くの生徒さんが管内に就職されていますよね。これは大変重要な地域貢献だと思うんです。

だからそういうことだと思うんです。私は前回総合学科にはいろいろな問題が含まれ、利便性の問題もあったりする。しかし丸実が内発的にこのことを研究してきたことを評価

したいという趣旨の発言をしたのはそういう意味なんですね。

専門性をどのように担保しながら行くかということも、何か非常に大事なことであり、ということをお願いしておきたいと思います。

(和泉委員)

私は、総合学科のところは取りあえず丸子で賛成です。立ち上がりは、1校でいい。2校にする意見については反対しません。

なぜ1校にこだわっているかというと、塩尻志学館の話聞いていても、実は新しいものをつくったときには、先生もそうでしょうし、周りもそうでしょうし、結果を出したいと思ってエネルギーを費やしていくんですよ。

だからデータは、一般論としてはいいほうへ出ていくんですよ。要は教育というのは継続性があるかどうかということなんですよ。だから立ち上がりのところのデータは初期データであって、私はあんまり解釈はしない。だからむしろ新しくつくる、例えば新しい高専ができたときは、中学校からいいやつが結構行きましたよ。そういうものだと思っている。だから教育というのは、要はエネルギーをずっと継続していけるかどうかの、むしろシステムだとか、チェック機能だとか、運営母体だと思うのです。だからさっきの話も聞いていて、実業高校を普通科にするか、普通科にするかというのは概念の話であっていいけれども、そこにいる組織がどうやって育っていくか。だからそういう意味合いでは、今の学校経営を、学校経営という形で、今PTAだとか父兄だとか先生となっているけど、これに第三者機関を入れていって、それはある面では透明性を求める。それから応援団にもなる。ある面ではチェック機能にもなる。

今先生のいろいろな不祥の問題やら、それから教科査定の問題を「やっている、やっていない」の問題もある。こうして透明性のところを、やっぱり第三者機関がチェックしないか、そうしたら私はエネルギーは続いていくと思いますよ。今その機能が、一部のところでやっぱり低下しちゃっているでしょ。

それはなぜかということ、時代の変遷の中についていける機能が入ってこないんだと思う。ニーズだとか考えだとか。だから、総合学科を1つつくるのは賛成。だけど最初は1つつくって、そこをちゃんと育てていい方向につくってよかったねというエネルギーをやっぱりやって、その中で次のステップをつくったほうが、いいんじゃないかなという気がするんで、増やしていくことについては全然やぶさかじゃないです。

だけど最初は1つでいいんじゃないだろうかと。それはどういうことかということ、次のことを考えていたときに、これからの統廃合ということは取りあえず第一ステップであっても人口の流動性、それから生徒の流動性というのは、必ず起きてくるから何らかの時点でもう1回考えなければいけない。

そういう時点の中で吸収していけばいいんじゃないかなと思っているんで、そういうことを将来的にやっていく、ことについては反対ではないけれども、取りあえずは1校ということと、それからこういうことをやっていくときは、やっぱりエネルギーを維持し続ける、第三者機関というものを必ず入れておいて、その中でやっていくと「ずっと燃えていく」と思っているんで、むしろ新しくつくことにリスクを考えるよりも、どうやって育てていくか、位置付けていくかということが、地域にも我々にも問われているんじゃない

んで、そういう面では応援団ではありたいと思っています。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございます。

（太田委員）

先程原委員のほうから、私の申し上げたいことを整理していただいた発言をいただき、大変ありがたいと思っています。おっしゃるとおりなんです。私も普通高校を、総合学科に転換することは大賛成です。

しかし、基本的には賛成ですが、実業高校を総合学科に転換することについては、私は疑問がある、問題もある、そういうことでございます。

それで丸子実高の先生の皆さんが、自主的に総合学科がいいと思われているのは、何を理由にされているのか、ということ、どうしてもお聞きしたいと思うんですね。というのは、実高に来る生徒さんの動機付けについて、「もう疲れた。もうできない。だから総合学科のような形態を取って、何とか授業に生徒を引き付けていきたい」、そういう一種の限界点を見て切り替えられているのか、どうかということです。

そうだとしたら、私は逆じゃないかなと思います。もっともっと各学科の魅力を高めて、いい教育内容を提供することによって、それをもって解決していくべきだと私は思います。ですから、そこのところはどうも私はわからない。自主的に実高の先生方がその思いを持ったというのはいいと思うんですが、その思いの背景にあるのは何かということが問題であり、私は心配しています。

私は丸子実高以外の普通高校の中でモチベイトを継続して与えられない、教育の限界点にあるというような普通高校があると思います。私の頭の中には具体高校名があります。そういう学校こそ総合学科に転換して、もっともっと勉学の意欲付けができるようにした方がいいのではないのでしょうか。

（飯島委員長）

何か総合学科が、転換すると非常に悪い学校になるような表現になりがちですが…。

（市川委員）

すみません。私は昨日は1日静岡の中央高校で単位制の学年について勉強させていただきました。そのことについてまた機会がありましたが、申し上げさせていただければありがたいなと思います。

総合学科の関係につきまして、ちょっと一言申し上げたいと思います。総合というその意味は、職業と普通科と区別せずに一緒にして、総合させて単位制をとっていくということです。専門性が薄れるとかそういうことではなくて、キャリア教育を柱として個人レベルでその子にもっと合った、専門性をより高めるならば何単位を取ってもいいわけです。

普通科へ行きたければ、全く普通科にも行けるわけです。そういったコースを今までは学級制、学年制でとってきたもの。例えば機械科とか応用生物とか、あるいは家政とかイ

ンテリアとか、そういった名前を取ってきたクラス制、学級制の壁を取って、どこでもそこへ入ったら、その学校には施設や人材、先生方が最も大事なんです。

もちろん予算も配布されているわけですが、それを個人ベースで取っていけば、より確かな専門性が持てる子が出るだろうし、そうじゃなくても普通科の進学も高められるという、両方取れるような施設と、先生方資格を取れる。簿記の資格の先生もいらっしゃれば、土木の専門もいらっしゃる、そういった総合的な先生方と施設がある、それが総合学科ですから、そうじゃなくて普通科の単位制と職業科から発展した、職業科と普通科をミックスした総合高校としての単位制と区別されるとよろしいかと思います。

以上です。

（西村委員）

ぜひ、太田委員、佐藤委員も総合学科を見に行ってください。基本的には1年のときにいろいろなことを勉強して、「じゃあ私はこのコースに行きたい」と言って、2年、3年で専門的に勉強するんです。

私が塩尻志学館を見に行った時には、野球部のキャプテンがバイオの実験をやっていたんです。「どうしてこの実験を」と言ったら「私は興味を持ったので、2年、3年でこれをやっています」と、大学でも引き続いて勉強していきたいと言っていました。先ほどおっしゃった専門性という面については、ひけは取らないと私は思っていますから、ぜひ見に行ってください。

それから先ほど太田委員のほうからお話ございましたけれども、物事を立ち上げるときには、まさしく和泉さんが言うとおりすごくエネルギーがいる。また、みんなに見られてますから、失敗はできないんです。だから丸子実業のほうで検討しているとすれば、性善説で私は考えてあげたいと思います。多分性悪説はないと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

事務局のほうで、丸子実業の生徒さん等のご意見は耳に入っておりますか。例えば先生方とか。さっきは行政の意見は、遠山委員のほうから前向きに検討していきたいという話がありましたが、教職員や生徒のほうからそういう声は何かありますか。

（吉江高校教育課長）

具体的な意見ということでは入っておりませんが、ただ教職員は非常に前向きに、例えば夏休み等を利用して他県の総合学科をいろいろと分けて視察に行っていて、いろいろ研究されているということは耳にしています。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

そのほかにご意見はございますか。

(荻原委員)

総合学科がいいと思うんですが、ちょっと学校のいろいろな取り組みを見たときに、例えば普通の進学校、「中進学校」、言い方が悪いですが「低進学校」、定時制、専門学科と言うところの取り組み方を見ても、大体1年はいろいろな教育を試みようと。共通の取組をやろうと。2年目からはコース制あるいは習熟度別、少人数、小クラスというような格好で学習指導あるいは教育課程が組まれていると。

そういう中で、志学館の単位制を見ても、そこへ特徴的には学年で1単位、2単位、キャリア教育というような格好で入っているわけです。そういう意味では、どこの普通高校あるいは職業高校、普通科と職業高校と一緒にやっているところも、そういった感じの単位制ではありませんが、そういった取り組みの仕方をしているところが、非常に苦戦しているわけですね。

学習意欲から日常的な生活習慣から、基本的なあいさつから、そういった部分、学習意欲、そういうところにやはりてこ入れといいますか、そういうところの配慮も忘れないでエネルギーは注入しなければいけないと思います。

総合学科について従来学校で資産を生かす、あるいは重装備を生かすという部分はわかるんですが、一緒にやはり普通高校あるいは専門高校、職業高校、そういうところにもやはり光とお金と人材を当てないと、皆さん大変な努力をしているのにまずいんじゃないかと、私は一言言って、賛成は賛成ということをお願いしたいと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

地元である宮阪委員、何かご意見ございますか。

(宮阪委員)

すみません、ではお願いします。

私どもの中学校は、丸子実業よりもっと山手側にあるわけですが、中学を卒業した生徒の半分は、丸子を通り越して上田に行っているというのが現状です。

どうしてかというのは思いますが、そのような現状があるようです。現状、丸子には普通科というクラスが3クラスあるんですが、その普通科というクラスと上田の主体の普通科というクラスは、生徒の希望がちょっと違うという状況かなと思っています。

あと職業科が混在していますけれども、その職業科に入った子どもたちは、入ったときに農業とか選ぶんですが、卒業した後はその職業科の職業に就くというふうには限らないと思います。

そしたら1年目から、先生が指導をしていただける、子どもの将来を導いていただけるという総合学科なら、高校の途中で生徒が自分の行きたいところを見つけたときに、学科を選んで意欲的に勉強して行かれるのではないかとということで、期待できるかなと思っていますので、丸子が総合学科になるというのには、親としては期待をしております。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

これは決を採るとか、そういう問題ではないかと思いますが、総合学科をこの第2通につくるということは、皆さんの賛成をいただいております。そしてたたき台で丸子実業という名前が挙がっている。

その中で地元の行政も後押しをしたい、そして先生方も研究を積み重ねている。地元の保護者の皆さんも、期待を込めているというお話になってきますと、第2通とすればこの後付帯決議は幾つか皆さんお考えいただきたいと思いますが、丸子実業ということで第2通は決定をしたいと思いますけれどもよろしいでしょうか。

はい、ありがとうございます。それではまた付帯決議は、いろいろ細かいこともあるかと思いますが、付けたいと思います。ありがとうございました。

それでは委員会が始まってから1時間半たっておりますので、ここで10分ほど休憩をしたいと思います。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

それでは休憩前に引き続きまして委員会を再開したいと思います。

休憩前に第2通に総合学科を設ける。その学校は丸子実業ということで、合意をいただきました。ついてはその付帯決議について、どんな付帯決議を付けると、よりいい総合学科になっていくのか。その辺のご意見をいただければと思います。先ほど1点、2点、バスの増便や、しなの鉄道のダイヤの改正を依頼するというお話もありました。

どうぞご意見をいただければと思います。

(中沢委員)

この通学区に1校という方向で、前半に話しされたように丸子実業ということが、ここで協議されたということなんですが、これは前からご意見は出ていますが、地理的に見てやはり通学は佐久から見ると極めて偏りがあるんです。そういうことから佐久の状況というものをよくよくまずは考えていただかないと非常に困るかなということを思います。

先ほど荻原委員さんからもそんなような話があって、もう1校というのがあったんですが、結果的には1校ということで落ち着いてきたので、審議をまた繰り返すことはまずいと思うんですが、佐久での生活を非常に長いことしてきたんですが、丸子という町は現状では非常に不便なところなんです。それをいかに少しでも不便さをなくしていくかという、これは十分配慮していかなければいけない件だろうと。

バスを出すとか、いろいろありますが、もっと何か方法はないのかなという、そういうことを思うんです。今すぐ、どういうほうがいいのかというのは思い付かない面もあるんですが、ほんとこれを十分討議していただきたいという気持ちがございます。

(和泉委員)

長野県の利便性ということについて、山があって山を越えないと隣へ行けない。それが少子化の中で過疎ということと、逆に多様性を求めてだんだん山の中に住む人だとか、いろいろな生活形態があると思うんですよ。

その中である程度学校をまとめていかなければいけないということは、要するにその生徒さんの通学を確保するということは、スクールバスでもいいし、究極的には、将来的にももっと学校の問題点が出てくるんで、基本的には寮を造っていったほうがいいんじゃないかと思います。

あるいは寮ができなかったら、取りあえず下宿という形について、何か補助を出してあげるとか、その辺のところはこれからさっきこの問題を討議するまでは、必ず利便性。しかし交通網を持っているんですが、交通網というのはやっぱり民間企業ですから、赤字になったりお客が少なくなるとなくなっちゃうんですよ。それでもやっぱり生徒の足は確保してあげたいということに、確実にしてもらわないといけな。それは長野県が持っているひとつの地域性という問題を考えた場合は、これはぜひ入れていただきたいというのがひとつです。

それからあとひとつは、先ほど学校経営と言いましたけれども、これらのことについてもうちょっと第三者を入れて、いろいろな意味で透明性、それからあとチェック機能、応援団、そういうことで先ほどの地元の行政だって構わないと思うんです。この辺のところをもうちょっとわかりやすくしていけば、今、民間企業は利益等で評価するんですが、公立の場合はなかなかそこに対して危機感がないというのが私の意見です。

そういうことで経営をすることに、学校経営という言葉の中でですが、もうちょっと地域の代表だとか、いろいろな形の意見を入れていって、そうするとやっぱり見られている、あるいは応援団がいるということ、やっぱりうまくいきたい、あるいはいい生徒をつくっていきたい、あるいは生徒にしてもあそこの学校を出たということは、やっぱり1つの自慢といえますか、ひとつのステイタスになるわけなので、そういう学校づくりはしていただきたいと思います。

寮の話になりましたけれど、前に言った意見のぶり返しですが、これからは国際性もあるんで、これからは労働人口というのは間違いなく減ります。外国から人が入ってくる、そういう中でその人たちを受け入れて、ある程度国際交流あるいはいろいろな勉強ができる状態は、ひとつのシステムとして持っていくほうがいいんじゃないかということで、2つの意見は提示させていただきたいと思います。

以上です。

(佐藤副委員長)

先ほど市川委員のほうから、こういう好きな科目を、単位を取ったら卒業できるんだ。十分専門性も、学力も心配ないというようなお話がございましたけれども、やはり決められた時間、単位数の中で十分できるということは、保証はまずできないと私は思うんです。

悪い言葉で言いますと、虻蜂取らずのような学力の内容の高校生が出てくると、こういう危険性が十分あるので、私は前々から総合学科については最小限1校という主張をしてきました。それと付随しまして、まず学校というのは優秀な先生がいて、スタッフが十分

いるということが条件です。

そういう意味で、どうかどういふカリキュラムを組むか、これは後で決めることでしょうけれども、それに十分対応できるスタッフを十分用意する。あるいは外部から非常勤講師をしっかりと呼んで専門性を高めるというようなことに、十分配慮してもらいたい。

特に教員の配置、これについてはひとつ先ほど和泉委員のほうから話が出ましたが、どうかしっかりとエネルギーを注入してもらいたい、こういうふうに思います。

以上です。

(原 委員)

今後も議論にも大きくかかわることですので、一番本質的な学校改革の際出発に当たっては、やはり当事者の意見をよく聞くと、伺うということだと思うんです。

つまりA高校は何かの学校へ、B高校は何かの学校へというふうに、上から押し付け的で学校が改革されるということではないと思うんですね。私はたびたび内発的という言葉を使っておりますが、そういう視点がほんとに大事だというふうに思うんです。

その際につまり、今は丸子実業さんという名前がもう挙がっていますが、丸子実業さんが今どのようにお考えになって、例えば私たちが心配したり、私たちが意見を交換している、その専門性の問題についてどのように考えていくか。

あるいはその地域の期待に応えるには、どういう系統が必要だとか、そういうことについてどうお考えになっているか、こういうことを十分検討する時間を保証するということだと思います。

そういうことを受けて私たちが議論していかないと、今度の改革プランがこっちへどうだ、あっちへどうだということになってしまうというふうに思います。それが非常に大事な基本的な視点。つまり当事者の改革への思いといいますか、それから具体的なほうと、それを十分に時間的にも保証していただきたいということです。

2 点目は今、佐藤委員もおっしゃられたように、塩尻志学館の例を持ってして、総合学科はいいものだという理解があるとすれば、これはやや早とちりではないか。やっぱり県下第一号でできた学校。そのほかいろいろ有利な条件がいろいろありますからね。志学館がよかったからというふうには、そんなに単純にはいかないと思うんです。

ややそこにおいては、意見の中に楽観的なといいますが、総合学科オールマイティ的なニュアンスを感じるわけですがそうではない。従って志学館以上にスタッフの点においても、さまざまな条件整備の点、これにおいても十全な対応をしていただくということが大事だというふうに思います。

佐久の面からの問題は、もう既にご指摘があったとおりです。

(太田委員)

まさに専門性について、私が今まで申し上げてきたところであり、佐藤委員、原委員のほうからも意見がございましたとおりだと思います。

何回も申し上げているのですが、農業科という位置付けがどうなるのかということは、長野県の農政をどうするのかという、そういう政策の中で論じられて、農業科教育そのものをどうするのかということ、考えていただいているのかどうか。そういう論議があっ

たのかというところを、先回もお聞きしたわけであります。この点へは明快な回答をいただいていないんですよ。

それから商業科ですね。今はもう国際会計の時代。ですから従来の会計、商業の勉強だけでは通用しません。国際性のある先生を招聘（しょうへい）して新たな専門性を加えていくとか、付加価値を高めていくとかという努力をしていただきたい。土木建築科もありですね。土木建築業が衰退化してきていますが、対地震の建築だとか、いろいろな新しいニーズも出てきているので、そういうものに対して積極的に取り込んで新たな付加価値を付けられるような先生、経営資源の再配分をぜひお願いしたいと思います。

（市川委員）

お願いします。

開校にあたっては、施設の面それから先生方の学校のシステム上のノウハウの面、インフラがあってもやはりノウハウがしっかりしていないとできませんし、それに付随します意欲だと思います。

こういう生徒をどういうふうに育てるか。多様な生徒です。例えば工業科にいても、バスガイドになる。インテリア科にいても、木工に進む子はわずか。そして農業につきましても、自分の専業農家を継ぐ意思があって農業を選ぶ者も少ないと。そういった中で農業科、それをはじめとする職業高校と、そして普通科と一緒にやってやむを得ず意図はしていないのですが、輪切りの進路指導と言われている中で子どもたちが選んで来てしまった経過、その中で先生方がこれまでの概念に全くない個人レベル、単位制という点ですね。これに対応できるかどうか。

今まで学級制、学年制、そうした中で教育を進めてきた。これに対して個人レベルに、ほんとに寄り添って、基本的にはキャリア教育の流れを根幹に据えた全校をあげての進路指導だというふうに思いますけれども、そうした個人レベルに、個に寄り添っていくような教育をしていくためには、我々の言われていました総合学科、総合学科単位制の高校において教育していくという、我々の十分な心構え。総合学科で指導されている先生方の心構え、あるいは意識の転換が非常に課題だと思います。

その点につきまして、塩尻志学館のいい点をよく学び取って、いかに施設、インフラを利用しながら子どもたちの意欲をかき立て、そして個に寄り添って専門性を磨きながら社会に巣立っていく。このキャリア教育を根幹に据えた、個に対する寄り添いができるかどうかは、先生方の研修と意欲にかかっているかなと思います。

その点につきまして十分な準備段階と、先生方の研修の時間を十分に取っていただけるような配慮。あるいはやはりあらためて予算をしっかりと取っていただく必要があると思うのは、ひとつ転換をするという意味において、非常にインフラの整備が必要なところも出てくるかなと思いますので、十分な予算と先生方の研修の機会を設けていただいて、総合学科が機能するまでの十分な準備をお願いしたいと思います。

(遠山委員)

先ほど宮阪委員さんからお話のあったように、丸子実業高校が総合学科になっても、そこを通り越して上田の方へ生徒が通うという事になれば、県教育委員会でも考えて頂かなければならないと思います。

従って、都市部の高校の数や学級数を減らすことが、周辺地域の高校を活性化することになると思います。

また、先生方の人事についても経歴や序列で行うのではなく、寝食を忘れて一つの学校で教育に打ち込んで実績をあげるような先生を重視した選考を以って管理職への登用を計るなど、人事改革も必要ではないか。

また、教育は都市部で行うというコンセプトを捨て、田園風景のある大らかな地域で、しっかりやるということが大事だと考えます。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

いろいろ意見が出ておりまして、これは議事録に残っておりますから、付帯決議、この項目を入れてということではなくても、私は県教委はきっちりこれは真摯(しんし)に受け止めていただけたと思っています。

付帯決議を文字として載せるには、最低限何だということはいかがでしょうか。

和泉委員がおっしゃっていた、生徒の通学の利便性を十分考慮していく、これは大事だろうと思っております。それに対してバスの増便だとか、いろいろなことが出てくると思います。又、下宿の件などもそうだと思います。やはり生徒が中心になりますから、生徒の通学の利便性を十分考慮していく。これは1点文言として入れたほうがいいのではないかと思います。

そのほかに、文言として入れたものがよいと思うものについてご意見ください。

(佐藤副委員長)

一点聞いておきたいのですが、丸子実業というふうに決まったわけですが、県教委のほうでは教育内容の中身、これは既にお持ちですか。例えば魅力あるコースですね、どういうものをお持ちか。もし大まかでも結構ですので、聞かせていただければありがたいなと思います。

(飯島委員長)

事務局、お願いします。

(柳澤教育主幹)

中身の問題かと思いますが、こういった系列をつくり、どういう教育内容を提供していくかと、こういったことにつきましては、基本的には今後の検討ということになるかと思いますが、それぞれの地域あるいは学校、そういった周りのいろいろなお考えもございましょうし、そういったことを考慮しながらということはございますが、私どもの候補案でお出ししましたデータの中では、現在さまざまな学科コースを持っておりますので、そ

ういった例えば普通科、先ほど普通科というお話がございましたけれども、その中でも現在例えば文系理系、教養スポーツとか福祉、応用生物、いろいろなコースに分かれておりますので、そういったものの発展型とか、あるいは建築工学系の発展型はどうかとか、あるいは商業、被服と、こういったものもたくさんそこにはございますので、そういったことを融合するような形とか、あるいはまた新たな発想でとか、今後の検討ということになるかと思います。

なお推進委員会の中でも、こんなものはどうかというようなことがございますれば、そういったことも参考にしながら実施計画につなげていくと、こんなことになるかと思えます。

（西村委員）

付帯条件ということで、利便性について先ほど話がございましたけれども、ぜひもう一点付け加えていただきたいのは、先ほど何人かの方からお話がございましたけれども、「状況の推移を見ながら佐久地区でも開設、開校を検討する」と、いうことも入れていただければいいんじゃないかなと思いますが。

状況次第では、佐久地区の開設も検討すると。

（飯島委員長）

いかがでしょうか。「状況を見て」でありますから。十分状況を考慮してということで。

（荻原委員）

私はそういう皆様のご意見もわかるんですが、ただ佐久でも地理的条件からいっても、地域高が多いということによっても、やはりもう1校やってもいいのではないかと思います。状況を見るということは、県教委が状況を見なきゃ何にもできないということになるかもしれませんので、私としては佐久のほうで手を挙げる学校もなければ楽ですけど、手を挙げていただいてやったときには、これはやるんだと。

その代わり決意表明をもって、ここをお願いしたいと思えます。

（飯島委員長）

状況を、早い時期に佐久方面の設置も考えてほしいということですか。言葉がちょっと、上手にまとまりませんけれども、何かそういうような言葉を入れるということで、この辺また文言は十分考えて入れたいとは思えます。

状況を見ながら佐久方面も考慮してほしいという条項を入れるということでよろしいでしょうか。

（原 委員）

全体の議事進行にもかかわるんですが、ここで付帯条件の文字まで検討していたら大変ですよね。これはもう既に幾つか意見を出されているわけですね。私が申し上げたことも、つまり学校が十分な時間を取って系列を考えると、教育内容を考えると、これは大事なもののなので入れてほしいわけです。

それから十全な教育条件ということも、入れてほしいわけです。だからそういうことについては、ぜひ委員長さん、副委員長さんにご苦労いただいてまとめていただきながら、次回以降に出してもらおうほうが、議論が生産的で、今の議論も大変大事ですけども、話題を少し変えたらいかがかと思います。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございます。

それではそのように、付帯事項につきましては、委員長、副委員長に原案を考えて皆さんにご提案ということでよろしいでしょうか。

はい、ありがとうございます。それでは次に移ってまいりたいと思います。

もうひとつ私たち、この推進委員会に委託された事項がございます。それは多部制・単位制と適正配置であります。これにつきましても、皆さんからご意見をいただきたいと思っています。

なお、多部制・単位制につきましては、冒頭に申し上げましたように、27日に静岡中央高校に視察に行っております。また11月4日にも何人かの委員さんが視察に行っていたくような計画になっております。

実際のところは視察が終わった後の委員会が、大変皆さんの意見が集約できる時期かなと思いますが、今日はひとつ当初の報告事項の中で、望月高校の報告事項も挙がっております。その辺のところをどういうふうに委員会では考えていくか。私自身は、皆さんの頭の中に望月高校の要望事項等、十分頭に入れながら議論を進めていっていただければありがたいなと思います。

これをここでどうだ、いい悪いという判断ではなくて、皆さんの討論の中にそういうものを十分考慮して議論を進めていっていただければと思っておりますけど、その辺はいかがでしょうか。

（原 委員）

冒頭に申し上げたことについて、現時点での対案についてのコメントをいただければと思います。

（飯島委員長）

望月高校は対案という形で文書をこの委員会に提出されたのですが、県教委はその辺のところをどうお考えですかという、原委員のご依頼ですが、事務局いかがでしょうか。

（吉江高校教育課長）

実は一番難しいご質問かと思っています。と言いますのは、私たちがお出ししたのはかねての候補案でございまして、それと替わる形で望月高校のほうで同窓会を中心にお出したものにつきまして、私どもがコメントしますと、変な表現なのですが一歩間違えますと、その内容を否定するようなお話になりますものですから、でき得れば私どものほうの考えは、皆さまのある程度議論が進んだ段階でお求めいただくほうがいいのかなという気もするのですが、その点いかがでございましょうか。

(飯島委員長)

どうですか、原委員。

(原 委員)

現時点ではそういうことですね。

(飯島委員長)

はい、現時点ではそういうお考えということですね。

(荻原委員)

高校の取り組みの中で、夢科高校の部分で地域の中でどのような形で存在していくのか、不透明で気掛かりだと。そういうことで中学校側に募集をかけたり、そういう格好でやっているんだけど、やはり望月高校がそういった格好で対案を出してきたのは、私はこの第2では初めてではないかと思います。

それはどうしてかという、人の学校というか、ほかの地域の学校を挙げて、あそこはやめてもいいよというようなことはなかなかできません。現実的に無責任な格好で、あそこの高校はいらないよということはできませんので、やはり望月高校としてはそういった地域の中でどうやって存在していくかというようなことで、やはりほんとに考えた上での提案だと思いますので、ある程度やはりそういった格好で重く受け止めていかないとまずいんではないかと思います。

県教委はこの段階では、多分言えないというお話ですが、確か望月高校は地域高、定時制とも中学の不登校の経験者を受け入れ、また定時制では高校を途中でミスマッチした退学生あるいは学校生活になじめず去っていった高校生を受け入れていることもあるわけですから、それと地域教育プラットホームという格好でやっている、そこをやはりある程度認めていかないと、対案については大変重大に考えていきたいというふうに思っていますので、選択肢という意味で対案としては、望月高校の関係者の皆さんのその思い入れを重く受け止めたいということを一言申し述べたいと思います。

(和泉委員)

最初のときに質問したのは、そういうことを今後の進め方を含めてだったのですが、例えば議事進行を進めていって、回を追うごとに次から次へと対案が出てきたときに大変じゃないかなと思っているんですよ。

だから今、荻原さんが言われたとおりどこかの時点で、要するに地元志向の意思表示があるから、聞いてもいいと思うし、それは何にも拒むものはないと思います。だけどその公平性を言うんだったら、手順の中である地区ではむにやむにやしているけど、要するにちゃんとしたオフィシャル性を持ってなくて、だけど意見としてあるよということがあるんだったら、どこかの時点で代案を受け入れるということを話としているんだったら、どこかで決めておいてやらない、進捗ごとに、ひょっとしたら決まりかけたときに、また手を挙げられたりして、もっとこっち側にもとなってしまう。

この委員会は混乱しそうな気がするんですよ。だからもう見込みがないということであ

れば、この意見は尊重してあげて。だからどうなるかはわかりませんよ。やっぱり委員会として真摯（しんし）に受け止めて、やらなければいけないんじゃないかなという思いがあるんだけど、その扱いを最初のところで、どうするんですかということの話をしたんですけどね。

（飯島委員長）

これは大事なところだと思います。これから具体的に、それでは代案だとか反対だとか、委員会にものを申したほうが有利に働くという形は、大変問題だろうと思います。やはり私たちは公平性に判断していくというところが必要かと思います。

そこでどうでしょうか。その扱いについて、お考えください。

（和泉委員）

この多部制・単位制というこの形態は、我々はなじみがないし、新たに提示された案で、よく理解されてもいません。ですから初めにどこに持っていくという論議ではないと思うんです。どうあるべきなのか、この目的のためにどういう学校づくりが必要で、その結果やはり場所がどこであるというふうな持って行き方をしないと、場所ありきの論議はおかしいと思います。

（飯島委員長）

この辺のところは、難しいところの議論になってようかと思います。私たちのこの推進委員会に付託された事項の中で、適正配置という問題が、今回の多部制・単位制には非常に絡んできます。要はこの17ある第2通学区の中で2つ減をして、その中の一つを多部制・単位制というのが、いわゆる最終答申であります。それを受けて私たち委員会を進めておりますから、この辺のところを含めながら。

それじゃあ多部制・単位制はいらないんだ。必要としないということになると、2つ減をするのか、又は、それを受け入れていくのかということまで、話は行くと思います。そこまで言ってしまうと、大変難しい問題になってしまいますから、魅力ある学校づくりで多部制・単位制を前向きに検討していくのだというところでお考えをいただければなと思います。

そしてそのために、既に先ほど言いましたように、ひとつは視察に行き、直々にまた2校目を視察に行きます。それを十分皆さんの目で見えてきていただいて、現実を見てきていただいて、前向きな検討にしていきたいと思います。そしてそれを今度はどこへ持っていくか。どこの高校へそれを設置していくか。

望月高校が手を挙げているのなら、望月高校へ持っていくのか。それじゃあそのときには、1校は減らさなければいけませんから、併せてそれじゃあどこを減らそうと、皆さん考えるのか。それも頭に入れながら、ひとつ意見を出していただくということも、大事なかなというふうに思います。

今日はまだご意見をいただくところでいいと思いますから、どうぞご意見をください。

(原 委員)

委員長さんが今おっしゃっていることは、少し違うと思いますね。例えば 17 校を 15 校というのは、一番冒頭の会議の資料であらためて見ていると、学校数の目安なんですよ。決定事項じゃないんです。目安なんです。そしてその後、どこが統廃合だ、どこが学校転換だとか、たたき台であったでしょ。

つまり公平性というお話もありましたが、17 校を 15 校にする、多部制・単位制、総合学科、これがとうとう校名まで出された。今、どういう事態が起きているか。そういう名前が挙がったところは、中学 3 年生が不安に駆られて、その学校を忌避する傾向さえ出てきているわけです。

そういうときに、その当事者の学校を支えている地域の皆さんが、こうしたい、ああしたいというのは当然じゃないですか。それをこの議論に乗せるのは公平性かというのはおかしいじゃないですか。6 月以来、ずっとそうやって不安に置かれている学校が、今、ようやく公式なご発言をされている、それを私たちは重く受け止めるのは当然じゃないですか。

それが最終的に議論の結果、妥当かどうかという問題ではありませんよ。それについては十分な検討の結果、導き出される結論でありまして、先ほどの荻原さんがおっしゃられたように、この対案を重く受け止めたいというのは、全くそのとおりだと思いますよ。今までそのくらい何カ月も厳しい状況に置かれてきているわけですからね。

議論の流れとして、従って頭の中に置いておくという表現でもいいんでしょうけれど、このことを県が出しているたたき台があり、一方ではそれに対する対案があるわけですから。私どもの机の上にあるこの資料のひとつとして議論をしていく。そういう取り扱いじゃないでしょうか。

(飯島委員長)

望月高校のこのものを、対案と考えるとかそういう意味合いではなくて、我々の高等学校改革プラン推進委員会の設置要綱の中に、私たちが所掌事項として依頼された事項が 3 点ある中で、多部制・単位制の配置に関する事項というのが入っているわけですね。

そして合わせて、報告書にある総数の決定基準に基づいて県立高校の再編整備に関する事項も考えてほしいというふうに依頼をされているわけです。ですからその点について、考えていただきたいということでもあります。ですからそれは県教委の最終報告どおりじゃなくて、もしそのまま置いてほしいという意見が煮詰まってくれば、それでもいいでしょう。

ただこれを考え、頭に置いて議論をしていただかないと、私たちは委員会設置要綱によって委員を指名されているわけですから、それをぜひ考えてほしいということでございます。ですから、望月高校のことも頭に入れながら、十分意見を出していただいて結構だと思いますけれども、お願いしたいということでもあります。

(西村委員)

今、委員長がまとめられたことで私は十分だと思います。

先ほど和泉委員のほうからいろいろな代案が出てきたら困っちゃうじゃないかとおっしゃいましたね。たまたま 24 日の新聞報道を見られた方もいらっしゃるかもしれませんが、第 1 通学区では推進委員会が、来月 4 日まで具体的提案を募集という言い方をしているのです。

読みます。「第 1 通学区の推進委員会は、11 月 4 日まで県教委の再編案で統廃合の対象に挙げた高校の存続を求める団体などから、再編案に対する具体的な提案を募集している。地域の声を聞く機会を設けるのは、第 1 通学区の推進委員会で初めてである。単に再編案を批判したり、高校の存続を求めたりする内容ではなく、地域の団体や組織の具体的な意見を、推進委員の議論に反映させる目的。推進委員長が内容を審査した上、11 月 10 日前後の会合で発表する」と、そういうことをやっているんです。具体的にそういう動きをしている通学区があります。

だからもしそれであるなら我々も、それに見合った形でやればいいのかと思います。

(飯島委員長)

西村委員から、新聞の記事にも出ておりましたから、皆さんもご存じだと思いますけれども、第 1 通学区では対案を募集しております。これは県教委のほうへ提出していただく形になっていたかと思いますが、この辺を含めながらご意見をください。同じような方法を取るのか、あるいは今出てきているものだけをそういう扱いにするのか。

(太田委員)

私の記憶では、まだこの多部制を導入するとかしないとか、そういうところの論議すらまだ結論が出ていない状況ではなかったかと思うんです。この委員会の中で、その論議もされない、結論も出ないのに、場所がどうだとか何とかと言うのは、早急すぎるのではないのでしょうか。

まず段階を踏んで、この学校そのものの在り方、ほんとにそれは必要なかどうか、この論議をまずしていただいて、その必要性をみんなで共有化して、やろうということでしたら、じゃあどうするのか。そういう段階を取るべきだと思います。

(飯島委員長)

多部制・単位制を認めるか認めないということではなくて、今、西村委員は、もし県教委が出したたたき台でだめなんだという代案があれば募集をしようという、そういう方向もあるということでご意見をいただいたわけですから、じゃあこの 2 通ではやめておこうということならば、私は募集はやめても構わないと思います。

望月高校がこういう形で対案を出してきた以上は、正式に代案等の募集を受けたらどうかというご意見だろうと私は思います。

(中沢委員)

私も今、西村委員さんがおっしゃたことに賛成です。ひとつ具体的に、今日対案が示されましたので、「もしまだあるなら出してください」と言って、その内容だったら大事な案として、我々が討議していかなければいけないと思いますね。まずはだから実際出てきたから、「まだありますか」という声掛けはしてもいいじゃないかと思います。

それからもうひとつは、多部制・単位制について前回までもいろいろ論議されてきましたが、実際身近にはないということで、県外等の資料等も寄せていただきました。また県外視察も具体的に始まりました。そういうものも含めながら、やはり長野県らしい多部制・単位制というのはどうなのかというものも、もうちょっと突っ込んでいく必要があるかなと同時に思います。

具体的に、もう視察が始まりましたよね。静岡でしたか、行って来られた方もこの中にもおられるので、そういうこともやっぱり報告として具体的にどういう状況だったのか、どういう差があり、どういう課題があるかということを、率直にここでも出してもらったりして進めていく必要があるかと思います。この2点です。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

(遠山委員)

私もすぐ隣町ということで、望月高校が大変苦勞していることが痛いほど解ります。今回望月高校の同窓会の皆さんが苦渋の選択として「多部制・単位制高校」として存続させたいと盛んに言われておりますので、ぜひ取り上げていただきたい。

(荻原委員)

対案の話ですけれども、私は丸子実業がこれで決まって、その前に対案を出してくれていたら私はわかるんですが、多部制・単位制に関して望月高校がなくなることにに関して、南高が多部制のたたき台に上っていることに対して対案をやれというのは、私は酷な話じゃないかと思います。

それは白紙撤回は要求できますね。だけど例えば北高を、代わりに候補に挙げるよと。そういう格好で、例えば望月がこういう格好になりましたけれど、じゃあ臼田もやめるよと。臼田をそっちへやるよと。私のところは無傷でいきたいと、そういったものが実際に対案で出てこれたら私は評価しますけれども、望月の場合そういった形で苦渋の選択をしたわけですけれども、そういう格好で対案というのは難しいと思うんです。

自分のところへ立候補するのは簡単だけど、人の高校をなくすということは、私はこういう段階ではちょっと対案として挙げるのは酷だと思うので、対案として上がってくる分には、実際に上がってくる分には私は構わないと思いますけれども、こちらから無理に「まだありますか」というようなことは、いいんじゃないかという気がします。

意見として申し上げておきますが、よろしくお願いします。

(飯島委員長)

非常に難しい意見だろうと思います。確に対案となりますと、実際県のたたき台では望月高校が蓼科高校と一緒にするというのがある、そこへ自分たちが多部制・単位制なら受けますよという話になると、それだけだとちょっと対案にならないような気もするんです。

確かに臼田高校とか、どここの高校とかという名前を挙げるのは非常に酷な話ですけども、対案となるとその辺のところも踏み込んで意見をいただかないと難しいのかなと思います。うちのところは、もう多部制・単位制。そういうふうに手を挙げるだけで、それを対案として取り上げるかという、その辺のところはどうでしょう。

(原 委員)

ご発言の趣旨をもう少し伺いたいのですが、望月が蓼科と一緒に。その望月が、これではなくなるわけだから、こういう学校にしたいというのが、何で対案にならないんですか。

(飯島委員長)

今、荻原委員の発言のように、自分のところが一緒になる高校であったのに、それを自分たちが手を挙げたという形になると、一緒になる高校がなくなるわけですから、その辺のところ、それを全部受け入れていいのかなという感じがしないでもないという…。

(原 委員)

ですから申し上げているように、たたき台なんでしょ、県から示されているのは。それに対してこういう案がありますよと、それが文字通り対案じゃないですか。

荻原委員が心配されているのは、野沢南高校が多部制に転換だということに対して、南高の関係者の皆さんは、だったらA校にきなさい、S高校にきなさいといったら、とても酷だと。そういう趣旨でおっしゃっているわけですよ。そりゃそうだと思いますよ。

(太田委員)

ちょっとよろしいですか。

(飯島委員長)

そのところをちょっと、ご議論ください。

(太田委員)

論議がおかしいのではないのでしょうか。我々は多部制も単位制も、ほんとに理解して論議をし尽くしてないんですよ。理解もしていないのに代替案が出てきて評価をできますか。まずこの多部制のところをもう少し論議して、理解を深めることが優先ですね。

(西村委員)

今、太田さんがおっしゃったように、我々は動いているんです。ところが和泉委員のほうから、こういった代案が出てきたときに、この後またぼろぼろ出てきたら議論が空中分解するので、じゃあそれに対する歯止めをどうしましょうかということが意見が出てきたから議論しているのです。

もともとこの会議は、これから多部制・単位制を我々はどのように認識するのか。前回我々が総合学科を第2通につくりましょうということを決めましたよね。従って、これから議論して多部制・単位制をやるかということだと思います。

(太田委員)

ですから、それまで待っていただくことです。いろいろな代替案が出てきても我々が理解できないで判断することは非常に問題です。ですから申し訳ないけど待ってください。そう言わざるを得ないんじゃないでしょうか。

(飯島委員長)

そのような形で進めさせていただいてよろしいでしょうか。

(和泉委員)

太田さんが言われている手順はそれでいいと思うんですが、要はこの委員会としてオフィシャルにやっぱり検討時間とかそれを、例えばやりますよと言ってから時間軸がやっぱりいるような気がするんですよ。

この委員会は、当初の話だと年内ぐらいのイメージもありましたし、その時間軸に検討時間を与えないで、一応仮定的に対案を出してくださいよと言っていて、それは時間軸で実際不可能な形にしておいたら、かえってよくないんじゃないかと思ったので、だから手順として多部制の討議は進めていいし、対案についてはまだ中身は不十分であるけれども、それなりに理解されて望月さんはもう出されてきているんだから、それはやっぱり理解してあげるか、何か聞く場を取るかは、それは必要じゃないかなと思います。

そのときに後から、その運用面を手順としてやっておけばいいんじゃないかなと思って、最初の意味では言っているんですけどね。

(飯島委員長)

並行で行くという意見であります。ですから多部制・単位制はこの委員会で十分討議を続ける。そして、もし対案があるならば1通でこのような募集をした経緯も踏まえて、この2通ではどうしようかということであります。

その辺は、いかがいたしましょう。

はい、それでは2通でももし対案があるならば、日にちを切っていつまでというのを募集しながら、私たちは私たちが多部制・単位制の議論を進めていくと、そんなふうにしてよろしいでしょうか。

はい、それでは日程については、事務局のほうで次回の私たちの委員会、それからその後の委員会がいつごろ計画する予定か、それに合わせたいと思いますがいかがでしょうか。次回はいつ予定でしょうか。

(植松主任教育支援主事)

今回は11月13日の午後、一応候補として考えております。

(飯島委員長)

11月13日が候補。そうしますと、1通はいつ会議で5日にしたんでしょうか。

(西村委員)

この新聞からはちょっとわからないですね。

(飯島委員長)

わからないですかね。

(吉江高校教育課長)

すみません。

今回の11月15日は内々にはお話をいただいておりますが、次々回以降の日程はまだ固まっておりませんので、ある程度時間も取る必要もあるかと思いますので、ちょっと今後の意見をお取りして、これはいつまでにいただくという形を取らせていただくかにつきましては、もしよろしければこの場で委員さんのほうで私ども事務局と正副委員長さんで、打ち合わせさせていただくということでご了解いただけるのであれば、正副委員長さんにご相談の上で決めさせていただくということをお願いしたいと思います。

(飯島委員長)

よろしいですか。

それでは募集日程については、事務局と委員長、副委員長に一任させていただくということで進めさせていただきます。

それでは今日も時間がだいぶ少なくなってきています。多部制・単位制について、市川委員が、静岡中央高校に実際視察に行っております。それについてのご意見、感想がございましたら、ひとつお願いします。

(市川委員)

お願いします。

多部制・単位制のことに关しまして、私がどの程度に申し上げていいのかちょっとわかりませんが、この中にも深い意味がいろいろあるということです。

基本的には先ほどありました総合学科の議論ですが、この中で単位制を取っていったら、それがコースとしてまとまっていた場合に、それが体育系コースですとか、商業系コースですとか、そういうふうになってくるということをご理解いただきたいと思います。

基本的には総合学科では、職業科と普通科が合わさって総合学科。しかしながら、多部制・単位制に关しましては、呼び方がそうであっても同じ単位制高校であるということベースは同じで、基本的に「個に寄り添う」、それが何かの柱に寄っていったら、これは同じことです。

しかしながらもともと普通科をベースにする場合につきましては、全日制単位制、定時制単位制と、そのような認識でよろしいかなと私は考えております。結論から申しますと、私たちは多様な生徒が、どの程度学び、どのように学んでいるかと様子も拝見させていただきました。

目に見えることもさることながら、やはりお話をたくさん聞かせていただいたことの中に、私たちがやはり得るものがあったように思っています。まずは開放された施設のインフラの面がありまして、これがちょっと長野県のとりかたと違うと思いますけど、とにかく施設がそれなりに合わされてつくられている。個に寄せて、個に寄り添って単位を習得しながら、将来を見据えて学ぶとういか、開放的なインフラが整備されているというところがあります。

次に校舎の間取りですが、教室の学びの姿の中には、ほんとにお年を召した方から若い方、同じ教室の中で学んでらっしゃると。たくさんの人数の教室もあれば、3人とか10人とか多様な教室、見て回る教室、それぞれ多様な人員構成というような内容に。やはりこういう学びの姿で単位制が行われているんだと。

それで地域に開放されて、生涯教育センターの役割も果たしながら、お互いに学ぶ意欲を受け取りあいながら、キャッチボールしながら、学ばれているんだと、私は非常に好印象を持ちました。

基本的に全く我々のスタンスと違うところは、静岡は早くから、13年前にスタートしたこの学校につきましては、それまでの定時制に関する子どもたち、あるいは地域の課題が、それぞれ非常に大きな課題を抱えておりました結果、このような統合された形の多部制・単位制の学校を新たに作るようになった経過をお聞きさせていただきました。

これはそのまま13年間でノウハウを蓄積しながら、静岡県ただ1つの、さらには増設、また新たな学校を新設されている経過があるように聞いておりますけれども、定時制を統合し、通信制と合わせて静岡県の欠くことができない、そういった学業に、あるいは課題を持ってきた、しかしそれを克服できなかった子どもたちが新たに、いわば敗者復活といひましようか、学びの治療を受けに来て、また新たに巣立っていくという姿を、多様な先生方から学ばれているというような印象を、私は持っています。

これは私たち長野県としては、このような学校がないことについて、後れを取っているなと私は考えました。今回のことは大変不幸なことに、静岡のようにその場にあっては青年期、子どもたちの教育をどうしようかというところから発しているのではなくて、今回のきっかけが少子高齢化に伴う高校の統廃合と、特に論じていられるところに非常に問題点がありますけれども、私たちは多様な先生方の中で、一人一人が地域の学びと一緒に90分の授業という長いひとつひとつのこまにも耐えながら勉強されていると、学ばれていると、そういう姿に大きなものを得たような気がいたしております。

ビジョンとしまして、細かなことはまだまだたくさんあるわけですが、基本的に私たちはこれから学級制、学年制としか考えられなかった高校教育を、これを大学レベル、大学が単位制で行われているわけですが、大学のレベルのものを高校に下ろしてきまして、高等教育の単位制を中等教育に下ろして、これを実践されているという、これの必要性を感じて、これからの多様性、21世紀を担う子どもたちの多様なニーズに答えていくと、そういう場が必要であるかなと再認識したような気持ちになっておりますけれども、いかが

なものでしょうか。

細かな点のご質問があればお答えさせていただきますが、私の印象としては最終的にはそういう形になっております。

（飯島委員長）

よろしいですか。ありがとうございます。

（西村委員）

市川委員は説明が、すごくしにくいと思うんです。だから質問とおっしゃいましたが、幾つか私のほうからお伺いしますので、それについてお答えいただけますか。

ほんとは、事前に静岡中央高校については資料もいただきましたので、我々はもうちょっと頭の中に入れておかなければいけないんですが、では質問ですが、先ほどおっしゃったように既存の高校が13年前にどういった理由でこの多部制・単位制の学校にしていっただのか。

それから長野県は、1部、2部、3部を考えていますが、どういった形態を採っているのか。それぞれの子どもたちが何人ぐらいいるのか、学習しているのか。

それから先ほどおっしゃった学年制、学級制じゃない形について。それからカリキュラムを自分で希望していくことについて、生徒自身がどう思っているのか。

その辺、ちょっと教えていただけませんか。

（市川委員）

静岡地区、東海工業地区を背景にたくさんの就労人口を抱えて、その中で昼間働いて夜勉強というような、そういう形態がたくさん取られてきて、各地に定時制がつくられてきた。

しかしそのさまは十数年間に大きく変わりがして、静岡では中学校でさまざまな問題を抱えた子どもたちが定時制に行くというケースが増して大きくなっていくわけです。ほとんどそういうケースになってきているわけです。

従って働きながら学ぶという背景ではなくて、進路指導の最後の行きつく場という形で定時制が持っていかれてしまったと。そういう中で定時制の本来の在り方、そして新たにまた復活して学ぶ意欲を持って社会に出ていくと、そういう施設としての高校の役割として生まれてきたというふうに思っております。

よく教えていただきました。そういうようなことで生まれてくる背景は、定時制がその機能を失った点というふうに私たちは思っておりますけれども、これは長野県についても同じように思います。

（西村委員）

昼間の全日制と夜の夜間を持っていた高校なんですね。今の野沢南高校が具体的にありますが、静岡中央高校というのはそういった高校だったのですね。

(市川委員)

いいえ、違います。これは定時制を統合して、ただのそれぞれの定時制を統合してまとめまして、新たに施設を先ほど申し上げましたように、個に合わせて開放的な、これはインフラは大変重要だとは思いましたが、新たに開校して定時制を幾つか廃止し、各高校にありました定時制を廃止しまして、新たに設けたということになります。

この中で712名というような数字を私は覚えております。学年ではありませんので、卒業年次という言い方もありましたけれども、50名の先生方の中でお一人の先生が15人の子どもたちを担当しながら、一人一人に寄り添って励ましながら全県から通ってくるようですけど、多様な子どもたちに対応して寄り添っているということでございます。

年齢の年配の方から、もちろん中学を卒業してすぐこの高校に入るという子どもたちが120名という話だったかと思います。そのうち3年間で卒業する子どもたちが60数名。その以降は修業年限が8ですので、在籍は限りなくいいというようなことで、一人一人に単位が取れるまで指導するという。

従って80何単位で卒業する子もいれば、100単位以上取って卒業する子もいると。進路は一流大学に進学する子もいれば、就職する子もいると。非常に学力の幅も広く、考え方も多様と。セミスター制といいまして、卒業式も2回あり、入学式も2回あると。その中で子どもたちは、例えば1学期は勉強するけれども、2学期になったら海外に行って、留学してまた帰ってくると。また学校へ戻り、さらに単位取得を始めると。

ほんとに大学と同じようなことが行われていると。制服、その他の生活指導は一切なく、子どもたちのやりたい学習方法を進めると。従ってスポーツその他、バスケットボールは非常に定時制の中で強いようですが、子どもたちの中でこれも先生方の寄り添うことがありますけれども、バスケットボールをやれる時間はみんなで集まってやろうということで、対外試合に出て、自発的にはやっております。

先生方が一人15人持って、ホームルームを経営しながら、90分の授業を持っていらっしゃることもありますので、文化祭では驚くほど多様な、文化系の文化祭ですが、非常に充実した文化祭が毎年行われているという話です。

そういうようなことが概要かと思えますけれども、ビデオ出演でしたが、たいがいはっきりとしたものの言い方で、しっかりとした子どもたちで、楽しく、しっかり物事をはっきり言うような、そういうような生徒さんだという印象を持っております。

ただ中学のときには、あるいはそのほかには高校を退学、中退してきたとか、中学では不登校で欠席が多かったとか、そういう子もほかの学校よりも、そういう子が積極的に受けている。やる気さえあれば伸びていくと。そういうようなことを目指していらっしゃるということです。

募集人員に対しまして、最初は500というような応募があったようですが、最近では応募のほうは多少減ってきているようなお話がございましたけれども、毎日問い合わせが日に4件は必ずあるそうで、先生方が対応する問い合わせが大変に多くて、その問い合わせの件数からでも、本校の必要性は感じているというお話もいただきましたけど、細かなことになると大変時間が長くなりそうですので。

昨日は、見学と時間と質疑応答の時間が大変オーバーしまして、それでもまだ聞きたいことがあったのですが、引き上げて帰りましたが、充実した内容だったと思っています。

(和泉委員)

質問いいですか。ちょっと聞きたいのですが。

さっき説明の中で、学校が増設するという話をしませんでしたか。この規模が大きくなるというイメージだったら、何かそういうニーズというか社会性があるんだったら、それを知りたいなということなんです。

(市川委員)

静岡市内にありますので、浜松のほうにもう1校と。そして三島のほうにもう1校と。そういうような計画で18年、今後進められるというような話でした。

(飯島委員長)

よろしいですか。

非常に一生懸命、市川委員ご説明いただくのですが、いかんせん資料が私たちもないものですが、イメージとしてはわきづらい、私たちも理解しづらいところがありますものですから。

それから群馬の太田へ行ったときは、行けない委員さんのために、資料をコピーでいいから配っていただくと説明していただくときにわかりやすいかなと思うんです。

今まで幾つかの多部制・単位制の高校を説明したときに資料をいただきましたら、それと合わせていただくとありがたいと思います。

(吉江高校教育課長)

失礼しました。昨日の今日だったものですから、昨日の資料をちょっとお配りできなかったんですが、いずれにしましてもそれぞれ行ったところでいただきました資料は、すべての皆さまにお配りするように手配させていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

多部制・単位制の件につきましては、太田委員さんから意見が出ましたが、私たちが十分理解していないと、これでいいんだという形にいかないというのは事実だろうと思います。その辺で群馬、静岡の両方視察した後に、その資料を基にしながら十分議論を深めて、そしてその後2通ではこうするんだ、前向きに検討するのか、どうするんだというような意見を聞きたいと思いますが、いかがでしょうか。そんなことでお願いしたいと思います。

この後、議論を続けても残り時間が中途半端なものですから、ここで事務局のほうから次回の委員会開催等の連絡事項をお願いします。

(植松主任教育支援主事)

先ほども申し上げましたが、次回は11月13日日曜日でございますが、午後を考えております。場所は上田方面で考えております。

(飯島委員長)

よろしいでしょうか。

それでは時間がちょっと早いですが、第 10 回の委員会を閉じさせていただきます。

ご苦労さまでした。